

# 遊

## 佐世保独楽で遊ぶ

**遊び言葉(一部)**

**対(つい)**  
こまが同時に止まった時の掛け声で、早く回した方が勝ち

**天下第一(てんかいち)**  
一番長く回った場合は上位となり、天下を取ったという

**助ける**  
こまの回りが弱くなったとき、ひもで助けて勢いをつけること

佐世保独楽は、美しい形状のほか、昔から「けんかこま」とも呼ばれるように、遊び方にも特長があります。その遊び方とは、まず「息長勝問勝競べ」の掛け声と同時に、全員が一斉に自分のこまを回します。少しでも長い間回った人が優位に立ち、先に止まった人から順番にこまを打ち合い、勝負を決めるといふものです。この遊びの中では、独特の意味を持つ遊び言葉が使われ、その種類の豊富さは全国一とも言われます。



◀回りが弱くなったこまを助ける 宮崎君

**こま回しの名人に挑戦**

校章に佐世保独楽が使われている祇園小学校では、6月25日、総合的な学習の中で、佐世保独楽本舗の山本さんなど、「こま回しの名人」を講師に招いて、3年生の児童46人がこま回しを習いました。

この日はあいにくの雨。同小学校の体育館が会場となり、子どもたちは、床に敷かれた狭い板の上でこまを回すことになりました。回す環境はあまりよくありませんでしたが、会場はこま回しを楽しむ子どもたちの熱気と歓声に包まれました。

子どもたちの目標は、「こまを回せるようになりたい」や、「名人に習って、もっと長く回せるようになりたい」など、さまざま。

山本さんとこまの回る長さを競った宮崎雅哉君は「山本名人にはやっぱり勝てなかった。もっと上手に回せるようになりたい」と、何度もこまを回し、練習していました。

名人たちの丁寧な指導の後、それぞれの目標を達成して笑顔を見せる子どもたちの姿が、あちこちで見られました。

# 匠

## 佐世保独楽職人



### 職人の技は教わるものではなく、 見て覚え、実際にやってみて 身に付けるもの

現在、こまを専業で作っているところは全国的にも少なくなりましたが、「佐世保独楽本舗」(島地町)は、大正4年からこまを専業で作りを始めて以来、今もなおこま製作を専業で続けています。

佐世保独楽の創業者は初代山本貞右衛門さん。その技術を引き継ぐ三代目貞右衛門(山本敏隆)さんは、ロク口作業を中心とした手作りの伝統を守り続けています。

こま作りで一番初めに覚えることは、かなな(かな)の刃を当てる角度。ロク口で回るこまに当てる角度が違つとかなな(かな)のはじき飛ばされることもあります。子どものころから手先は器用な方でしたが、作り始めのころはけがが絶えませんでした。

先代は、丁寧に、また自分に厳しく仕事をされる人でした。一般に「職人の技は、見て覚え、実際にやってみて身に付けるもの」ですが、わたしが疑問に思うことを先代に尋ねると丁寧に教えてくれ、学ぶことがたくさんありました。

三代目貞右衛門  
山本 敏隆さん(46歳)

もともと銀行員だった山本さんは、佐世保独楽本舗・二代目貞右衛門(山本幸俊)さんの長女・由貴子さんと結婚後、1年経ったころから本格的にこま作りを始める。昭和61年、三代目貞右衛門を襲名し、こま作りの伝統を守り続ける。



山本さんは、干支が描かれたこまなど、人々の目を楽しませるような新たな作品も作っています

回数を重ね、何とかこまの格好になるのに約一年、さらに経験を積んで同じ形のものを作ることができるようになるまでには、5年以上もかかりました。

わたしが三代目を襲名した当時は、「こんな格好のこまを作ったよ」と、よく回るこまを作ったと、お小遣いを手にした子どもたちが、自分だけのこまを注文した店を訪れていました。「こまの方がよく回るとはいえ、などと交わす子どもたちの会話が、こま作りの楽しさの一つでした。

最近、東京などの遠方からはるばる訪れてくれる人がいる一方、こまで遊ぶ子どもが少なくなつたので寂しく感じています。

現在では、全国を見ても、こまを専業で作っているところはほとんどなく、厳しい状況にもありますが、これからもこまを作り続け、佐世保独楽を守っていききたいと思っています。